

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

中国人日本語学習者の学習意欲  
—シャドーイングが及ぼす効果—

張 超凡

2022年3月

本研究の目的は学習オートノミーを促すシャドーイング活動を導入することによって、調査協力者の学習意欲に及ぼされる影響を明らかにすることである。本研究の対象は、日本に滞在する中国人日本語学習者である。本研究では、学習オートノミーを促すために、シャドーイング練習を導入し、調査協力者の学習意欲への影響を明らかにする。学習意欲の変化に基づき、シャドーイング指導の可能性を広げる。

## 第1章 序論

第1章では、問題意識から研究目的までの経緯について説明した。

筆者自身は元日本語学習者として、中国でシャドーイングの授業を受けた経験がある。しかし、当時の授業は学習者にとって非常に辛い授業であった。なぜなら、当時担当教員が使っていた音声材料はほとんどNHKのニュースだったため、興味を持っていない受講生が大勢いた。そして、音声材料のスピードが速すぎ、最初からついていけなくなる人も多かった。その結果、授業への関心度が低くなり、大半の受講生の学習意欲が低下していた。その結果、多くの学生にとってシャドーイング練習が日本語運用能力の向上にはつながらなかった。しかし、当時アフレコをしていた友人から、シャドーイングは発音練習として非常に役に立つということを知り、筆者も興味のあるアニメやドラマなどを使って練習してみた。半年ほど練習した結果、発音の問題も徐々に改善した。特に、当時の担当教員によると、筆者の滑舌の問題やアクセントの問題が改善された。さらに、日本語学習全般に対して、学習意欲が高まり、自信を持って学習するようになった。

また、近年中国人日本語学習者の学習意欲の問題が浮き彫りになるにつれ、学習意欲に関する研究が増えている。王・大浦（2010）では「留学当初は高いモチベーションを持っていたにもかかわらず、中国人留学生は学習意欲が低下していく傾向がある」（p.13）と述べている。特に来嶋・鈴木（2003）により、上級日本語学習者は日本に留学しているものの、日本語授業を履修しないという傾向が指摘されている。その理由は来嶋・鈴木

（2003）によると、学習者は大学に所属していても専門分野の研究活動を優先させる必要から日本語授業を敢えて取らないと主張している。以上の問題を解決するために、近年英語教育において、学習者の学習意欲を高めるために塩田（2019）はシャドーイングで自己効力感を高める可能性があるという。

特に中国人日本語学習者にとって、発音練習が少ないと指摘している。それを解決するために、シャドーイングを導入することによって、短期間で音声的問題点を解決し、達成感を与えられる。シャドーイングを導入する際に、練習材料の選択について戸田・大久保（2011）は、学習者が興味を持っている音声材料を使ったことで、シャドーイングを継続する可能性が上がるだけでなく、学習意欲を高める可能性もあると述べた。このように、中国人日本語学習者に対して、より効率的な学習方法と達成感を感じる学習支援が必要である。そして、学習オートノミーを促すシャドーイングを導入することで調査協力者の探究心を喚起し、学習意欲の向上につなげたい。

そこで、問題意識を踏まえて、本研究では日本に滞在する中国人日本語学習者を対象にし、学習オートノミーを促すシャドーイング練習を導入することによって、調査協力者の学習意欲にもたらす影響を明らかにすることを目的とする。その影響を明らかにすることで、シャドーイングの指導の可能性や学習意欲を高める授業に活かしていきたい。

本研究の目的は学習オートノミーを促すシャドーイング活動を導入することによって、調査協力者の学習意欲にもたらす影響を明らかにすることである。そのため、上記の目的を明らかにするために、以下の3つのRQを設定した。

RQ1：調査協力者は実践中、日本語の学習意欲に変化があったか。

RQ2：実践を通して、学習意欲が変化したら、学習意欲の変化に影響した要因は何か

RQ3：実践を通して、学習意欲はどのように変化していったか

## 第2章 先行研究

第2章では、本研究の理論的枠組みを述べるために、学習意欲に関する理論、シャドーイングに関する理論、学習オートノミーに関する理論に分けて整理した。その上で、用語を定義し、本研究の位置づけを述べた。

まずは櫻井（2017）と鹿毛（2013）は学習意欲に関わる要因を述べ、習熟達成目標と自己効力感の重要性を説明した。その上で、山本（2015）と縫部・狩野・伊藤（1995）はと日本語学習者が抱えている学習意欲の問題点をまとめ、王（2016）と蔣（2006）は中国人日本語学習者の学習意欲が低下している要因を示した。次にシャドーイングを定義し、シャドーイングの効果について言語面と情意面に分けて述べた。そして、シャドーイングの練習方法をまとめ、シャドーイングの教育現場において残された課題を述べた。最後、学習オートノミーについて先行研究を概観した。学習意欲を高めるために、学習オートノミーの重要性を述べ、学習オートノミーを育成するために必要とするものがわかった。

しかし、今までの学習意欲に関する研究では、主に量的研究をされており、多人数のアンケート調査を通して、学習意欲に影響を及ぼした因子を抽出した。しかし、従来の方法では、学習者の個人要因による問題を解決できず、集団の傾向しか見られないのである。また、シャドーイング実践では、学習者の心情面を分析したが、ほとんどの場合では多人数の教室内でアンケートを配られ全体的な学習意欲の傾向の解明で止まっており、学習者一人一人の心情面の変化に着目した質的研究が足りない。

以上の先行研究を踏まえて、本研究は、日本語教育の音声教育の研究において、特に学習意欲の変化を観察することによってシャドーイング指導の可能性を広げた研究として位置づけられる。

## 第3章 調査概要

第3章では、本研究の調査概要について述べた。本研究の研究対象は日本で滞在する中

国人日本語学習者 5 名である。まずシャドーイング練習のオリエンテーションをし、実践を行う。実践期間は 4 週間である。各調査協力者は一週間では最低 5 日 15~20 分の自宅練習とし、調査協力者に筆者がまとめたシャドーイング練習方法を提供する。全ての練習方法は調査協力者が自由に選択することができ、カスタマイズすることもできる。そして振り返りシートに当日の練習方法を書いてもらう。最初の二週間では調査協力者が関心を持っている音声素材とシャドーイングの教科書両方を用意し、後の二週間では調査協力者自分で制作し、練習してもらう。実践後、中国語で半構造インタビューを行う。

## 第 4 章 分析と考察

第 4 章では、第 3 章の実践の結果に基づき、調査協力者個別に分析と考察について述べた。

まず W さんは実践に参加する前に、日常生活の日本語を勉強する意欲が見られた。その理由はコロナのせいで、元々日本人との交流がかなり減ったということで、日本語を練習する機会が少なくなった。実践を通して、日本語の勉強だけができただけではなく、W さんに対して最適な練習方法にも身につけたことが一番有意義であると考えた。

U さんは社会人として仕事が忙しすぎて日本語を勉強する時間はあまりなかった。今回の実践を通して、U さんは今まで意識していなかった発音の問題点も気づくようになった。それを解決するために、U さんはシャドーイング練習を続けたいが、今回のようにリスニングからシャドーイングまでの過程が複雑だと考え、リラックスしてシャドーイングすることを決めて、今後の練習では自分が好きな素材に対してコンテンツシャドーイングだけをする様子が見られた。

H さんは何度も N1 を挑戦し、ようやく去年の 12 月の時に合格した。しかし、実践前では意識的に日本語学習を勉強していなかった。実践を通して、H さんが自分の不足点を気づいた。また、今後にもシャドーイング練習を続けたいという様子が見られた。

Y さんは何度も N1 を受験し、ようやく合格したが、日本語学習に対するやる気がなくなった。今回の実践を通して、Y さんは日本語学習に対する自信が増加し、自主的にシャドーイング練習ができたことが窺えた。

X さんは元々進学、就職のために日本語を勉強していたが、実践を通して、今まで困っていた日本語の問題点を解決し、日本語能力が伸びたことを実感した。また、今後では、より良い学習効果を出せるために、練習素材の探し方に工夫し、練習計画を立てた様子が見られた。

## 第 5 章 総合的考察

第 5 章では第 4 章の個々の調査協力者の分析結果に基づき、総合的考察を述べた。

5 名の調査協力者は本実践に参加する前に誰も日常的に日本語の勉強をしていなかったことがわかった。そこで主な原因はほとんどの調査協力者は試験競争動機を持ち、N1 に合格して以来、日本語を勉強しても意味がないという考えを持っているといえよう。また、昔

の学習経験によると、日本語学習を通して得られた成功体験が足りないので、日本語の学習意欲が高くないと推察した。

また、今回の実践を通して、全ての調査協力者の学習意欲が向上すると示唆された。しかし、中では、学習意欲に負の影響を与えるものも出てきた。シャドーイング練習素材そのものの難しさや化石化した発音項目は学習意欲に負の影響を与えることがわかった。また、練習素材の選択や学習者元々持っていた発音問題の解決などの問題点についてまだ解決方法を探していなかった。

## 第6章 結論と本研究の意義と今後の課題

第6章では本研究の結論と意義について述べた。結論から言うと、調査協力者全員の学習意欲が向上した。実践を通して、全ての調査協力者の日本語能力が伸びたことがわかった。それによって、制御体験と生理的・感情的状態を得た上で、自己効力感の増加がわかった。また、習熟達成目標理論によると、今回の調査協力者はもともとパフォーマンス目標からマスタリー目標への変化も見られた。

次に本研究の3つの意義について述べる。

1つ目は学習オートノミーを促すシャドーイング練習によって、成功体験を得て、自己効力感の向上が確認できたことである。2つ目は学習オートノミーを促すシャドーイング練習によって調査協力者の学習オートノミー能力の育成ができたことである。3つ目は今までのシャドーイング研究では、主に言語能力の変化を中心に研究したが、本研究ではシャドーイングと学習意欲を強く結びつけ、調査協力者の学習意欲の変化を確認できた。

最後に以上の結論に基づき、今後の課題について述べた。

本研究では、調査協力者を干渉せずに4週間のシャドーイング実践を行ったが、実践が進んでいるうちに、調査協力者は様々な学習意欲の阻害要因を感じた。これを解決するために、シャドーイングのオリエンテーションに工夫してはいけない。実践をする時に、教師として、学習者の学習状況を把握しながら、適当なアドバイスを出す必要があるだろう。そして、学習者の言語能力を高める方法はシャドーイングだけではないので、今後の実践では、様々な練習方法を組み合わせ、調査協力者が自由に選んでもらい、学習意欲に与える影響を明らかにしたい。

そして、今回の実践では調査協力者が各自に練習し、お互いに連絡を取らなかった。もし調査協力者たちはお互いに情報を共有し、一緒にシャドーイング練習する場合、今回の調査結果は変わったのかについて今後の課題にしたい。さらに、一緒にシャドーイング練習する場合、調査協力者がシャドーイング練習する際に録音してもらい、お互いに相手のシャドーイングの音声を聞いてもらい、相互評価するなら学習意欲に対する影響があるかどうかについて検証をしていきたい。

一方、今までのシャドーイングの研究では、言語能力の面を重視した。今後の実践では、調査協力者の言語能力やワーキングメモリの変化を測り、その結果を調査協力者に教える

上で、学習意欲はどう変化するのかについて今後の課題にしたい。

#### 参考文献

- 王明潔・大浦洋子（2010）「中国人留学生の学習意欲の変化に影響を及ぼす要因」『九州情報大学研究論集』12,pp.13-19
- 王俊（2016）「学習動機と学習行動の変化－中国の大学の日本語学習者を中心に－」東北大学大学院国際文化研究科博士論文
- 鹿毛雅治（2013）『学習意欲の理論－動機付けの教育心理学』金子書房
- 来嶋洋美・鈴木庸子（2003）「独習による日本語学習の支援－その方策と ARCS 動機づけモデルによる評価－」『日本教育工学雑誌』27(3),pp.347-356
- 櫻井茂男（2017）『自律的な学習意欲の心理学: 自ら学ぶことは、こんなに素晴らしい』誠信書房
- 塩田賀津子（2019）「英語初級者の英文法における自己効力感:シャドーイングが及ぼす効果」『*Sophia linguistica:working papers in Linguistics*』68,pp.119-134
- 蒋庆荣（2006）「关于日语专业学生日语学习动机的调查分析」『常州工学院学报』24(6),pp.117-120
- 戸田貴子・大久保雅子（2011）「日本語学習者の自律学習を促すシャドーイングの実践と気づき－発音の滑らかさの向上を目指した練習方法に関する一考察－」『ヨーロッパ日本語教育』15,pp.54-60
- 縫部憲源・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動機に関する国際調査－ニュージーランドの場合」『日本語教育』86, p162-172
- 山本晃彦（2015）「日本語学習者の学習意欲の変化とその要因－インドネシアにおける渡日前日本語研修の事例より－」拓殖大学博士論文